

「プロセスを楽しむことができる人間に育てよう」その4



園長 高杉美稚子

あんなに暑かったのがほんの1ヶ月前とは信じられないくらい、朝夕は涼しくなりました。気候の良いときに行うスポーツもよいものです。心地よい風に吹かれながら、時々散歩していると暑い中、汗をかきながら頑張った運動会を思い出しています。子ども達の頑張りぶりを空が見てくれたかのようなお天気でした。その中で、カー杯だしきって頑張った運動会。子ども達は、その年齢に応じた成長ぶりがみられ、たのもしく感じたものでした。運動会は、いつもお話していることですが、幼年少期の体力を出しきらないと本当の意味での体力をつける事はできないという特性から考えてみると、大きな意味があります。基礎体力と基本動作を身につけるといふ点では、とても効果がある運動会ですが、練習中こんなことがありました。

ある日、一生懸命走って転んだA君が先生のお部屋に入ってきました。以前にもこんなことがありましたので、「どこ怪我したのかなあ？」と問いかける私に、案の定「そこ！」と足先を示します。「そこって何処だろう？」「……」わかっているけど、答えが返ってきません。それから、気をつけて、子ども達に言葉かけしてみると、身体の名前を「ここ」「そこ」等の代名詞ですませている子どもが以前より多いのに気がつきました。

年齢平均でいきますとおよそ、「貴方の口はどこですか」という問いに1歳半で示せるようになり、3歳半でだいたい答えられるようになります。親指、薬指等は4歳頃、ひじ等は、6歳後期といわれています。

もちろん、身体はどこか悪い時「ここ」といって、示せば良いのですが、身体の名前を知ることが、どうして必要なのでしょうか。

- 第一に、自分の身体の部分の名前を覚えると自分自身に対して関心が高まり、自我意識の健全な発達を助けます。
- 第二に、よりいっそう部位が正確になり、電話等でも言う事が出来るようになります。
- 第三に、代名詞を使わないで、ものを言う習慣を助けます。
- 第四に、自分の身体の部分の名前を正確に覚えたり、言えたりすることから、自分のまわりにあるものの名前も正確に覚えたり、言ったりする事が出来るようになります。

子どもは、もう赤ちゃんの時から、自分の手や足を不思議そうに眺めている事があります。保護者の方も、子どもが興味を持っている時に教えてあげる事、会話の中に出来るだけ、身体の名前を入れてお話ししてあげて下さい。身体それぞれの部分の働きを教えると、よりいっそう、子どもたちもその部分に興味を持ってくれるでしょう。

これを機会に、家庭教育のひとつとして、身体各部分の名前を教える機会を持って頂ければ、もっと子ども達も自分の身体に興味を持ってくれる事と思います。そして、お話しも正確に伝えやすくなると思います。と同時に人に対する体へのいたわり、人への優しさも芽生えてくるのではないかと思います。

さて、人への優しさといえは、ゆりの樹幼稚園の教育理念「10E」の一つに、上手な自己表現力を身につける事「エンターテインメント」がありますが、お茶の水大学教授の森隆夫先生の言葉にこんな言葉があります。「子どもは何故可愛いと思いますか？それは、子どもは人の陰口を言わないから可愛いのです」という言葉です。大人にとっては「言うは易く、行うは難し」ですね。子どもは、目の前で言うことはあっても、陰で言うことは本当に少ないですね。上手な自己表現の一番はいずれにしても、子どもに限らず、相手の陰



口を軽々といわない事が人から好かれる秘訣でしょう。私たち大人も子どもからも学ぶ事はたくさんあるようです。

そんなところから、前回の「良い親のふりをする事の怖さ」の続きのお話です。前回お話したことは、では理想的な自立した本当の親はどんな行動をとるのでしょうかということでした。自立した親は子育てがとにかく楽しくて仕方がないのです。自分が好きである親は、子どものことも大好きです。なんだか子どもといると嬉しいのです。時には、うちのことは何とかかわいいのだろうとこどもをうっとり見つめることがあったりするので

す。そして、子育てをしている時、子育てをすることによって親自身が子どものために子育てをしていると感じるのではなく、自分自身が子育てをすることによって生きていくことができます。子育てはなんと楽しくて素晴らしいのだろうと感じることが出来るのです。時に子育ては苦しい時も悲しい時もありますが、それでも、子どもの世話をすることが苦にならないのです。たとえ苦しいことがあっても、その中から喜びを見つけることができるのです。苦しいことも楽しめるのです。自分がよく行く野原がきれいだから好きだけではやっぱりだめなのです。野原はくさいところもある、汚いところもある、でもなんだか好きが、これが本当の好きなのです。

以前にも書きましたが人はみな完璧ではありません。なにびとにも必ず欠点があります。そして、同時に欠点そのものが魅力になる時もあります。欠点があるからこそ、味がある、人間はどこか抜けたところがないと面白くもないものと思うのです。

夫婦関係も含めて相手のそしてこどもの欠点こそが大好きになれたら、こんな深い結びつきの間人間関係はないと私は思うのです。子どもが優等生だから好きではなく、出来ないところがかawaiiと感じる、これこそが本当に愛しているということなのです。

どんなにあなたが悪くてもできなくても好きよ。そこがかawaiiのといわれて、悪い言葉、行為を親に受け入れてもらって子どもは善人に育つのです。これが、親が子どもを受け入れる、またはすべてを受け入れるということは何かということであり、子どもが親を受け入れていく過程でもあります。

こんな理想的な親にはなれないと、皆さん思っているらっしゃるかもしれませんが、だから私たちは悩みながらも、その悩みから学ぶことが大切なのだと思います。そして、次に大切なことは、子育ては大変だけど、親になることを決断することです。親になったのなら、本当の親になることを自ら決断し、腹をくくるしかありません。親になるための学びをし、失敗を他人のせいにはしないことです。

そして自分と向き合って、同時に自分の嫌なところを見つけても、自分を責めないことです。たとえば、自分が子育てで失敗しても、自分自身が否定されたわけではないのです。行動が間違っただけなのです。だから行動を変えればいいのです。行動が変わり、事態が変わった時、自分が成長したことに気づきます。その為には、失敗したと感じる自分がいても、今、自分ができることから始めるのです。大きな夢も最初の一步からです。今できることをしないで、できない、できない、失敗した、失敗したといっているても何も改善はされません。だからスモールステップをふむ、小さな一步から始めることが大切なのです。

そして他人の悪口を言わないことです。悪口を言う心理は、悪口をいうことでしか、自分を保てないからなのです。悪口ばかりいう人は、心に、劣等感や負けたくないという強烈なパワーを持っています。そんな人には心の中に満たされないものが常にあるのです。それが心の穴です。だから、苦しいのです。そして、自分の心の穴を埋めるために、自分の心を平静に保つために、または負けたくなくて、相手を自分のし



ベルまで下げるために他人の悪口を言うのです。そしてその心の穴は、悪口や相手を非難することによって、満たされますが、所詮は、悪いエネルギーが取り込まれるわけですから、本当に満たされたことにはならず、むなしさや寂しさが残り、また、自分の中に悪いパワーが取り込まれて、ますます嫌な自分になっていくのです。

これが、前出のお茶の水大学教授の森 隆夫先生の言葉の意味ではないかと私は考えます。「悪口をいわない」、このことを実行するだけでも、よい親、素敵な人間になるための大きな第一歩になるのではないのでしょうか。

そして次に、本当に良い親にもなれなく、親になることを決断できなく、よい親のフリをしている人は 夫に対して、子どもに対して、他人に対してどのような行動をとるのかということでした。

動機は嫌われたくないから、見捨てられたくないからという愛情飢餓感からフリをして無理をしてしむのです。自分の不安が喚起されるから、夫に対して、子どもに対して、他人に対して、過干渉、過保護、過期待になるのです。

子どもが非行に走るの、また、弱弱しくなるのは手のかかる子どもを演じているのです。そのほうが親の愛情をもらえることがわかっているからです。親は「もうこんな子だから」と言いながら、世話をすることを喜んでいる、子どもは親の深層に気づいているのです。なぜならば親の愛がないと生きていけないからです。だから、子どもは自立しないで居続けるのです。そして親はさらに心配で過干渉、過保護、過期待になるのです。さらにそのことで自分の居場所を見出し続けます。悪循環が続いていくのです。

子どもが自立しない時、まとわりつく時は不安な時です。もちろん自分が自分で自分の不安なことがわかって、それを素直に出せることが素晴らしいとまず思うことはとても大切です。そして、次に大切なことはその姿を見て親が自分を責めないで、また他人のせいにならず、自分の素直でない行動を変えることが大切なのです。

他人に対して、必要以上に過期待を続ければ、当然「悪口を言う」ことにもつながっていくのです。

では、どうすればいいのかという答えは、「フリをせず、本当に自分が感じた気持ちを素直に伝えること」が大事なのです。心が通じるとは、本当の気持ちを伝えた時、その気持ちをわかってもらえた時に気持ちが通じたと感じるのです。本当の自分でいた時、その本当の自分でも受け入れてもらえた時のほっとした気持ちが心を育てるのです。これが「ゆりの樹幼稚園の心の教育」でもあります。

勝手に自分で、違う自分を演じて、勝手に自分が自分の周りにバリアを張っておいて、フリをして自分は理解されていない、本当の自分は違うといっても相手には気持ちは通じないのです。

又、親が子どもに感情を出すときは一貫性を持つことが大切です。子どもに気に入られようと「良い親のフリをし続ける親は何をするにも一貫性が、基準がないといわれています。一貫性がないから子どもがさらに、いつ、どのように対応されるか、常におびえていることになるので不安になるのです。親が一貫性がないからどうしていいかわからなくなるのです。だから、いつも【これをしていい？】といつも母親に聞かないといけない子になるのです。

不安な親は、自分の周りにいる人間の言動に影響されやすいですね。その時、その時の親の周りにいる人の意見で振り回されたら、子どもはたまったものでないのです。親のそのときの感情で言いか悪いかが決めるのであって、自分の、子どものそのときの自分がした行動で決めるのではないなら、子どもは振り回されるばかりです。

例えば「大きな木を切って来なさい」と親が言うときは、自分のいうことを聞くか、どうかをみているのです。木の大きさが問題ではないのです。でも、その時子どもは大きな木をきらないといけないと思ってしまうのです。

親の気分がいいときは大きな木でなくても怒らない、



親の気分が悪いときは大きな木でないと怒る、その予測不可能な世界で、子どもはノイローゼになるのです。だから一貫性を持つことが大切なのです。

一貫性を持つということはたいそうなことではありません。小さなことでいいのです。家に帰ったら、いつでも笑顔で迎える、ただそれだけでいいのです。帰ったらいつも、あたたかい、きれいなタオルが置いてあるでもいいのです。家で、顔をきちんと洗うでもいい。朝同じ時間に起きる、歯磨きだけは一緒にするでもいいのです。

それが学校や園にいるときの安心感、安定につながっていきます。家に帰ったら、いつでも、お母さんの笑顔が待っていると思うから、園や学校で辛いこと、苦しいことがあってものりこえられるのです。

小さな、小さな規則正しい習慣を一つでもいいのです。毎日続けることが、生活の中に安心感を持つことができるのです。

そして、気持ちがいいから五感が育っていきます。親にしかられるから顔を洗うでは五感は育たないのです。親に叱られるからでは、叱る親の前だけで「いい子のフリ」をして洗うことになります。自分が気持ちよと感じるから、人が言おうが、言わなくても、自分がするのはいいです。気持ち悪いから人が言おうが、言わなくても、気持ち良くなるためにするのはいいです。これもゆりの樹幼稚園のいつもお話ししている「心の教育」ですね。

特に小さい頃の手伝いの習慣はいいですね。自分で見て学んだことは忘れないのです。子どもが本当に育つためには安心感がなにより必要なのです。

安心すると、時として、子どもの小さな頭痛も腹痛も治るのです。子どもは病気そのものよりもむしろ、病気になったという予測できない出来事に影響を受けています。病気を治すのは、医者の仕事だけれど、その時の不安を取り除くのが親の仕事です。病気になったら、いつもあたたかいスープが飲める、冷たいすりおろしたリンゴが食べられる、プリンがでてくる、その安定が、病気を軽くしていきます。

子どもが本当に自立するためには生活と安心感が必要なのです。自立は生活があつての自立です。生活感のないところには本当の自立はありません。だからもっとも大切なのはやっぱり家庭教育なのです。家庭教育があつて、安心があつて、安定があつて初めて、子どもたちは、本当の自立ができるのです。家庭教育と一緒に茶碗を洗うでいい、箸をならべるでもいい、手をきれいにするでもいい、たいそうなことではないのです。毎日決められたこと、小さな、小さな生活習慣を親子で一緒にするというのが一番大切なことなのです。だからお母さん安心して子育てをしてください。いま、一生懸命されている教育が一番大切なのです。今の一生懸命があればそれでいいのです。

そうして、安定すると感性が育ち、自分の感情に気づくことができ、感情に気づけると自分の感情を隠さずに、素直に生きていくことができるようになります。そうすると、無理をして、自分と違うフリをして、苦しくなることはないのです。心の穴はできません。

自分の感情に素直になることを親が身をもって教えることが一番の家庭教育なのです。そのためには親がフリをしない、自分の感じたことを素直に伝えることが大切なのです。今日から、始めてください。続きは次号です。

